

『有機農業の世界』

有限会社 狩野自然農園(ナチュラルファーム カリーノ)

代表取締役社長 狩野 謙二 (かりの・けんじ)



略歴: 1949年農家の次男として生まれる。1968年、高校卒業と同時に民間会社に就職するが、1970年実家の農業を継ぐ。1972年頃から独学で有機農法に取り組み 1974年、ハーブ農法による有機栽培に成功した。現在、岩見沢市内のほか、中華人民共和国遼寧省大連市で有機農業に取り組んでいる。

私が、農業という職業についてしたのは、兄弟がやりたくないと言ったから。やりたくないのはあたり前。特に本家は、借金と両親が付いて来るのだから。後継者を選ぶ家族会議で私の生来の性格が出てしまい、「ならばやってみようじゃないか」となり、ここから私の人生が変わった。

私の農業のスタートは慣行農業(注)であり、最初から現在のような有機農業を目指していた訳ではなかった。しかし、私には農薬アレルギーがあり、通院生活を余儀なくされた。こういう状況から反農薬農業を始めたのである。

有機農業を始めた1年目はすごく不安な日々が続いた。誰にも相談のしようがなく、作物の生育もあまり良くない。どうしようか試行錯誤の毎日であった。それでも慣行農業の半分の量ではあったが、作物を収穫することができ、「何とかなるさ」とも思ったが、現実はそんなに甘くはなかった。販売をどうするかが大きな問題となった。そこで札幌の知人をお願いして、東京の八百屋さんに紹介していただき、そこからさらに自然食品卸を紹介してもらったが、大量販売は難しかった。何軒かたび込み営業もしてみたが、量をさばくことができず、最後は慣行農作物よりも安い価格で販売するしかなく、大変厳しい状況であった。それでも捨てるよりはマシと思った。そんな中、私の生活は苦しかったが、いつか消費者に判ってもらえる時が来ると思っていた。しかし、現実問題として家族とか、周囲の農家、農協の理解が得られず、村八分、つまり葬式とか火事だけは付き合おうが、あとは知らないよ的なことになった。子供達へのいじめが始まったのもその時期だった。

今、有機農業は、市民権を得たように見えるが、現実的には何も変わっていない。振り返ると子供達には悪いことをしたと思う。みんなと同じようなことをした方が安心と思う日本人が多い社会の中であって、私のようなはみ出し者にはつらいものがあった。しかし、自分の信念を貫き通すことが大事だと思い、最初に生まれた子供に虫に農薬を撒くことはいけないことだと教える一方、もっと他にやり方があると信じて試行錯誤を続けた結果、ハーブ農法を開発することができた。もちろん、これで満足したわけではなく、次に進むべき道としてバイオダイナミック農法に取り組み、講習会を実施したり、またさらに別の農法について思いを巡らせている。

私は、生活の安定にはつながらなくても、農業の世界を変えるお手伝いができると思ってこれまで有機農業をやってきたし、これを次の世代にバトンタッチしていきたいと思っている。それにしても土作りは時間がかかる。1cmの健康な土を作るのに百年くらいかかると言われていたが、私が有機農法を始めて30年くらいになり、地球のごく一部ではあるが、土を健康なものに変えるお手伝いできたのかなと思っている。土作り、作物作りは人作りによく似ている。時間はかかるが、1つの作品または芸術品を作るようなものかもしれない。自己満足せずに1つのことを続けて周りから変えていくことが大事であり、それを金に換算したり、物欲など煩惱に負ければ、初期の目的は達成できない。自分に負けないことが何より大切だと思う。

地球環境を考えると今、有機農業こそが生きる道かもしれない。有機農業は、ハーブ農法というオシャレな農法ばかりではなく、毎日がドラマであり、プロジェクトXみたいなものである。産業クラスターの生活で脳に刺激を与えて、健康で長寿の世界に入ることも可能である。農業に入り、人生を無駄に消費せず、地球環境を考える、意識の高い動物にならないかと、若者に問いかけたい。

現在私は、農地を新たに借入れたり、買ったりして耕地面積を広げる一方、新規に農業を始める人を支援しながら農業を営む人達のユートピアづくりを目指している。農業指導は、地元だけでなく中国でも行なっているが、自分の周りから少しずつ農業を変えていき、やがては世界中に有機農業を広げていきたいと考えている。より人間らしい生活を実現するためこれからも試行錯誤を繰り返しながら、色々なことに取り組んでいこうと思っている。

注:慣行農業(農法)とは、「各地域において、農薬、肥料の投入量や散布回数等において相当数の生産者が実施している一般的な農法のこと」(農林水産省「農林水産関係用語集」より)。